

金沢大学資料館だより

No.29 Mar.31.2007



四高開学120周年記念展示

—目次—

四高開学120周年記念展示	
—学都金沢と第四高等学校の軌跡—によせて	…2
高橋治氏・宮本憲一氏	
～四高開学120周年記念対談～	…4
平成18年度特別展概要	…7
資料館彙報	…8

四高開学120周年記念展示－学都金沢と第四高等学校の軌跡－によせて

四高同窓会幹事 喜田 惣一郎

平成18年（2006）10月22日に、四高同窓会は「四高開学120年祭全国大会」を開催した。

同窓会主催の全国大会はこれが最後だろうと言われていたこともあって、会員約500人、来賓・同伴者等を合わせた全参加者が700人を超える盛大な集まりとなった。

この前日、大学の記念行事として県立音楽堂で金沢大学と同窓会との共催で、寮歌による交響詩「北の都」のコンサートを開催した。市民にも開放した演奏会は、最後の全国大会を飾るにふさわしい催しとなった。

さらにこれに加え「四高開学120周年記念展示」が金沢大学資料館、附属図書館とかなざわ・まち博2006開催委員会との共催で石川近代文学館と金沢大学資料館の2か所を会場として開催された。いや、開催してもらった、という言い方が正確である。

これは120年祭に華を添えるものだった。

先ず、このことにお礼を申し上げなければならない。

はじめて、かなざわ・まち博事務局からわたし共の方に、120年祭に合わせて四高記念室をまち博の一環として取り上げたい、との申し入れがあったのは、昨年6月だった。一方、金沢大学からも同様の企画が提示された。ともに四高がテーマである。共催ということになった。

以後、作業は金沢大学資料館と附属図書館が主となって進められた。

わたし共は大会に向けての準備に追われていて、他の行事にまで手を伸ばすゆとりはなかった。それで、既存の四高記念室を展示物も含めて提供し、展示の方法やその構成も一切をお任せすることにした。記念室をどのように組み替え、あるいは手

を加えようとも一切口出しをしない、ということであり、事実、そうだった。

一方、密かに思っていたこともある。これまで、四高記念室の展示は四高OBにしか分からないという批判があり、解説を増やすなど対応が迫られていた。この展示を「四高」という学校を全く知らない世代の人達に組み立ててもらうことは、記念室の将来のためにも有意義だろうと考えたのである。

展示会初日に会場へ足を運んだ。そして驚いた。



石川近代文学館 四高記念室展示

記念室の様相が一変していた。それまでの展示は、どちらかと言えば、堅苦しくしかも収蔵庫の延長のように雑然としていた。が、それらはきれいに整理され、部活動の記録と部の看板が組み合わされたり、歴代校長の業績が新たに加えられたりして、これまでの展示にとらわれることなく、大胆に、むしろ小気味よいほどに変えられていた。さらに、不要なものが外されたためケース内にゆとりができ、スマートな展示となっていた。

しかも、展示期間中、資料館のスタッフの方々が説明員として常駐された。「よく調べていて、われわれ以上に何でも知っていた」と四高の先輩が感心していた。

展示物はそれまでの四高記念室に展示していたものを核とし、ほかに金沢大学附属図書館などから持ち込んだものを交えて構成されている。展示会が終わって借りた物を返還したとしても、少し並べ替えれば記念室として立派に通用するから、そのままの状態に残しておいてほしいとお願いした。変更後の展示は今も健在である。



「四高は不滅です」

120年祭の全国大会で、冒頭の挨拶に立った澁谷同窓会会長は、こう宣言した。

金沢は学都であり、それを学都たらしめている

のは、かつてあった四高を抜きにしては考えられないと言われている。また、金沢大学の林学長は四高の伝統と文化資産や寮歌を継承していきたいと表明されている。

この展示会も、四高を取りまくこうした情勢から醸し出されたと言える。

広坂の赤レンガと呼ばれている四高本館は、国指定の重要文化財であり、いわば国によって永久保存が保証されている。

会長の発言はこれらの状況を踏まえてのことであった。

現在、四高の本館を管理している県は、内部補修を行うと同時に、より多くの方々に親しんでもらうよう、四高記念室と文学館の展示を抜本的に見直すことにしている。

記念室には、閉校後半世紀を過ぎてはいるが、今もなお健在で将来も生き続ける四高について、学校、寮の生活、学習内容、特に市民の皆さん方とのつながりなどについて分かりやすく紹介することが求められている。

また、林学長からは四高記念室について大学資料館との連携・交流を図りつつ運営してはどうかとの提案もなされ、意を強くしているところである。

今回の展示会は、こうした展示見直しのための貴重な第一歩となったと考えている。

(昭和24年理甲修了)



四高開学120周年記念展示開幕式

高橋治氏 宮本憲一氏 ～四高開学120周年記念対談～

平成18年（2006）10月20日（金）夕刻、石川近代文学館において、昭和23年（1948）に四高を卒業された高橋治氏（直木賞作家）・宮本憲一氏（滋賀大学名誉教授）による対談が行われました。直前に学都シンポジウムを終えたばかりという忙しい中、両先生には大変興味深いお話をさせていただきました。

Q. お二人にとって四高とは？

宮本：四高というのは、私にとっては、人生の幕が開く最初の時期だったんじゃないかっていうふうに思いますね。つまり親からも独立をして自分の考えで歩いていく、そういう第一歩。しかも後から考えてみると、学問研究をはじめの最初の階段だったんじゃないかと思えますね。

高橋：宮本らしい言い方で、確かにその通りなんですけどね。同じことを別な言い方ですれば、四高の三年間が私に人生の余暇を与えてくれたっていうか。

宮本：余暇ですか（笑）。

高橋：無駄にしてよろしいという時間を与えて

くれた。それをその生徒なりに無駄にしないで、見た感じは落第しちゃうと放校されたり、いろんな形があるんだけど、それを結果として自分の人生に役立たせた三年間だったと。そういう学校や人生、余暇を今の青年たちは持っているのかなっていう不安があってね。

宮本：そうだね、それは確かにそうだな。だって高等学校に入ったらどっかの大学に入れるから、別にここで受験勉強をする必要もないしな。

高橋：そうなんだよ（笑）。

宮本：全く朝から晩まで遊んでいたってかまわない（笑）。

高橋：あれがやっぱりすごい制度だと思う。旧制帝大の学生総数の一割増くらいの高等学校の生徒しか取らなかったんだよね。

宮本：いや少なかったんだよ。旧制の国立の大学の定員よりも、旧制の高等学校の方が少ない。だからよほど難しいところへ行かない限りは必ず入れるから、みんな遊んでた（笑）。



昭和9年（1934）時習寮記念祭の様子

高橋：だからね、あそこで戦争を一つ終了した
というのかな（笑）。

宮本：そうそう。だから高等学校へ入れた時は
一番嬉しかった。これでバンザイだって
わけだから、みんな（笑）。

高橋：だからね、一、二年遊ぶつもりなら何に
もしなくてもいいんだよな。あれはすごい
制度だったと思う。

宮本：飯沢匡が書いてたよ。秀才をバカにする
機関である、と（笑）。だけどやっぱり
その高校の間楽しかったよな。そういう
余裕っていうのが、いま学生にあるかっ
ていうとね…。

高橋：まあ、あそこ（シンポジウム会場）へチ
ラチャッと顔を見せて、シンポジウムの中
にあれだけ同級生が入ってるなんて、
考えもしなかったんだね。あの連中が、
やっぱり同じ、種類は違ったりさまは違っ
たりしても、そういう時間の過ごし方を
することができたんだよね。それが今の
七十何年の人生に一種の共通体験として
ね、生きて残っているんじゃないかね。

宮本：そうだな。

Q. 金大生に期待すること

宮本：金沢大学といってもね、僕が教えていた
時期と今と随分変わっている。私が教え
ていた時は、金沢城の中にありましたで
しょう。それからこの旧四高も使ってい
た。だからそういう意味では、四高と同
じような立地条件の中にあっただけから
ね。だから市民との接触も常にあった。そ
ういう時期と、今郊外の非常に離れたと
ころに大学が行ってしまって、そこで生
活をしている学生の、金沢に対する思い
とか、金沢とは何だろうと考えることは、
全く違ってきているんじゃないかなと思



現在の旧制第四高等学校校舎（石川近代文学館）

いますね。とはいえ、僕の希望としては
ね、こんないい街ないんですよ。もち
ろん雪が降ってちょっと大変なことはある
けれども（笑）。ちょうど自分の手のひ
らの中に街が入っている感じがする。そ
れから、街のたたずまいだけじゃなくて、
ここで行われている市民の生活というの
が目に見える、そういう街ですよ。だか
ら、この街のよさというのをもっと身に
つけて欲しいね。それから、金沢とは何
かっていうことをもう少し考えて調べて
欲しいなっていうこともある。他の大学
に比べれば、金沢大学に来たっていうこ
とは幸福なことじゃないかなと僕は思っ
ています。だから、できるだけあんまり山
の中に閉じこもらないで、街へ出ようっ
ていうことにして欲しいね。

高橋：金沢に、私たちの高等学校、四高があ
ったっていうことと、金沢に新しい大学が
できたっていうことを直線的に繋ごうと
すると、さっきのシンポジウムにもあ
ったようにかなりギャップが出てくるん
だね。ギャップっていうのは言葉が悪いけ
れども、かなり直線的には繋がらないも
のが残ってしまうわけね。それで、それ
に対してこだわるとなるとは毛頭無いんで

すよ。私の内面にはね。それよりも、同じ金沢に学ぶ土地を選んだのだったら、ここで百年を越す学校で学んだ人たちが居るわけだから、その人たちに少しでも近づく方向に自分を向けていくことが、一番金沢を学都金沢という、学都を学都たらしめる方法ではないかなと思います。

宮本：冒険心を持ってね。金沢大学なんかは八学部あるわけでしょう。それは非常に恵まれたものです。だから、どんどん他の学部にも出かけて行って、講義を聴いて、単位が取れなくても講義を聞いてほしい。好奇心が無いんだよな、今の学生ね。これが一番僕気になっているんだ。もっとその大学に入ったばかりの頃だったら、好奇心があると思うんだ。普通はね。だから、他の学部でおもしろそうな先生がいたらそこへ講義を聴きに行くと。いろいろそれで他学部の学生と議論するというね。総合大学のいいところはそこにあるんでね。それを自分の殻の中にちんと閉じこもるんじゃなくてね。さっき街へ出ようと言ったけれども、街へ出るだけじゃなくて、大学の中でもね、自分の学部を超えて、そうすると金沢大学というものの全体像、あるいはよさというのが分かってくるんだと思うのね。四高なんか理科も文科も小さかったからね。学校として小さいから理科とか文科も超えて、みんな友人になって。あるいはいろんなサークルで知り合ってたわけだけど。そういう、友達にしても、あるいは教師に対する好奇心といたらいいかがあるって遊びに行く。あるいは違う人格とつきあいたい、あるいは違う分野のことを学びたいというのが四高時代の思い出ですね。それがいまも生きている。こういう

ことが、いま学生にとって非常に重要なことです。だから教養なんていうのも別に教えられてできるんじゃないくて、好奇心があり、なんかおもしろそうだからと学ぶうちに自然についてくるんです。自然にね。それをいまの学生の生活に望みたいと思います。

* 貴重なお話とご意見をお聞かせくださった両先生に深く感謝申し上げます。なお、この対談の様子は「四高開学120周年記念展示—学都金沢と第四高等学校の軌跡—」DVD（非売品）に収録されています。



第四高等学校に市民から寄贈された「Encyclopaedia Britannica[9th ed.]」と書棚

平成18年度特別展概要

四高開学120周年記念展示—学都金沢と第四高等学校の軌跡—

1. 開催の趣旨

今回の特別展示は、本学の前身校の一つである旧制第四高等学校の開学120周年を記念して開催した。

明治19年（1886）「中学校令」に始まる誘致、翌年の開校以来、昭和25年（1950）にその幕を下ろすまで、四高は金沢の街や人々と深いつながりをもって存在した。本展示は、このような四高の歴史を振り返ることで、改めて現在の金沢大学と地域との関係を見つめなおし、「地域に開かれた大学」の在り方を考える機会となるよう企画されたものである。

2. 会場・会期

第1会場 石川近代文学館（旧制第四高等学校校舎）

平成18年10月16日（月）～23日（月）

第2会場 金沢大学資料館

平成18年10月16日（月）～29日（日）

3. 主 催

金沢大学附属図書館、金沢大学資料館

かなざわ・まち博2006開催委員会

4. 展示内容

第1会場の石川近代文学館では、従来の四高記念室3室の展示を再構成し、それぞれ「第四高等学校の歴史と人物」、「部活動にかけた青春」、「金沢の街と学生生活」をテーマとした展示を行った。展示品として、井上靖など四高出身著名人の成績表のほか、当時の学生生活を体現する寮や塾、部活動に関する資料を公開。また、当時の雰囲気より実感できるような効果を期待し、BGMとして寮歌や応援歌を流した。

第2会場の金沢大学資料館では、「第四高等学校の教育と学問」をテーマに、教科書やノート類、実験機器等を展示し、西田幾多郎をはじめ優れた教育者であった教師たちの群像を紹介した。中でも、市民から寄贈された書棚入の「Encyclopaedia Britannica[9th ed.]」

は一際人目を引いていた。

また、展示にあわせて図録と記録用DVDを作成した。

5. その他記念事業

今回の展示は、四高開学120周年記念事業の一環であり、他に、四高同窓会による開学120年祭全国大会、交響詩「北の都」演奏会（四高同窓会・金沢大学共催）、学都シンポジウムや学都屋台食談（いずれもかなざわ・まち博2006開催委員会主催）等が開催された。

6. 展示を終えて—結果・反省・課題—

来場者数は、合計2,566人（第1会場1,387人、第2会場1,179人）を数え予想を上回る結果となった。これは、記念事業の一環であったことや広報の充実が主な要因として考えられる。期間中、来場者へ任意のアンケートを実施したところ概ね好評を頂いた。また、事前調査や展示公開を通じて新しい資料や知見を得たことは、今後の研究や教育にとって大きな財産となるであろう。

一方、課題や反省すべき点も多く残った。今回、初の試みとして2会場同時開催、無料シャトルバスの運行、外部機関との共催を行ったが、これらを実行する上での体制の不備、準備期間の不足は否めない。また、最も重要な展示内容に関する企画・調査・研究についても、やはり準備不足で悔いが残った。

さらに、本展示を契機として、四高卒業生から本学へ資料を寄贈したいという要望が出てきているが、収蔵場所や保存管理等の点から、積極的に応えることができない状況である。アンケートでも、貴重な教育・文化遺産であるこれらの資料を保存・普及してほしいというご意見が多く寄せられた。今後、こうした要望に応え、本学と地域の歴史を物語る歴史的資料を散逸させないよう努めることは、「地域に開かれた」本学の重要な責任であろう。

最後に、本展示の開催にあたり、ご協力をいただいた多くの皆様に深く感謝の意をささげます。（堀井）

資料館彙報（平成18年10月～平成19年1月）

9月13日	工学部非常勤講師安達實氏からヘンミ計算尺および説明書寄贈	10月31日	外村昌子氏から故水上一久法文学部教授資料寄贈
10月2日	客員研究員正橋剛二氏から前身校資料寄贈	11月2日	櫻井四郎氏から四高寮歌・応援歌CD寄贈
10月16日	平成18年度特別展「四高開学120周年記念展示－学都金沢と第四高等学校の軌跡－」共催（石川近代文学館～23日。金沢大学資料館～27日）。来館者数：石川近代文学館1,387人，金沢大学資料館1,179人。同日オープニング・セレモニー開催。来賓四高同窓会会長澁谷亮治氏，かなざわ・まち博2006開催委員会委員長代理事務局長松本静夫氏 展示期間中，井口哲郎氏・寺田喜久雄氏・山下公一氏から四高関係資料寄贈	11月8日	石川工業高等専門学校生徒展示室見学
10月17日	石川県立金沢桜ヶ丘高等学校生徒展示室見学。教育学部スポーツ文化史受講生展示室見学	11月9日	平成18年度石川県博物館協議会実務担当者会議（小松市公会堂）。館員堀井美里出席
10月18日	群馬県立富岡高等学校生徒展示室見学	11月15日	医学部図書館旧書庫より文書史料搬入
10月20日	学都シンポジウム（金沢市文化ホール）	11月16日	北陸大谷高等学校生徒・PTA展示室見学
10月24日	金沢市立ふるさと偉人館「生誕120年記念八田與一展－台湾の大地を潤した男－」（26日～平成19年2月25日）に四高文書史料貸出	11月21日	敦賀気比高等学校生徒展示室見学
10月25日	石川県立金沢二水高等学校生徒展示室見学	11月24日	石川県立門前高等学校PTA展示室見学
10月26日	石川県立野々市明倫高等学校生徒展示室見学	11月1日	韓国東亜日報一行展示室見学
10月30日	東京藝術大学大学美術館主催「The Wonder box－ユニヴァーシティ・ミュージアム合同展－」（11月4日～12月17日）に「石造遺物」貸出	12月7日	酪農学園大学一行展示室見学
		12月8日	駐日イスラエル大使館大使一行展示室見学
		12月14日	「四高記念室」整備推進検討会議（石川近代文学館）館員堀井美里出席
		12月15日	石川県立図書館協議会展示室見学
		12月16日	「書物の修復展－本をなおす，本をのこす」共催（石川県立歴史博物館）
		12月18日	深町弘吉氏から四高卒業写真寄贈
		12月20日	金沢大学資料館だより第28号刊行
		1月15日	台湾政治・同文化大学大学院生展示室見学
		1月17日	文学部助教授能川泰治氏から故長尾莊一郎氏所蔵レコード寄贈
		1月24日	黒須成章氏から金沢大学新聞等寄贈
		1月26日	韓国外国語大学学生展示室見学

金沢大学資料館だより 第29号

館長 田中 重徳（医学部教授）
館員 堀井 美里
館員 田嶋万希子
（平成18年12月31日退職）

発行日 平成19年3月31日

編集発行 金沢大学資料館

〒920-1192 金沢市角間町

Tel (076)264-5215 Fax (076)234-4051

E-mail museum@ad.kanazawa-u.ac.jp

ホームページ URL

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~shiryoy/index.html>